

— 招きつ 招かれつ —



## 卒業式に於ける名士と來賓

本校第一回の卒業式は、大正十二年の三月であつた。當時一般に、學校の卒業式と云ふものは、至つて輕視せられて居つた。東京帝國大學などでは、卒業式は廢止せられ、學生は卒業證書を教務課へ受取りに行くと言ふ狀況であつた。

卒業式は自分の子弟が、社會へ旅立つ門出であるから、何か彼等に記念となるべき、餞別を贈るのが親心で、卒業式を盛大にしたことは、私の願望であつた。それがため當代一流の名士を、卒業式に招待して、講演を聽くことを恒例とした。招待に應じて、臨場を忝ふした名士は左の方々であつた。

後藤新平伯、高橋是清翁、大藏大臣井上準之助氏、田健次郎男、徳富蘇峯翁、慶應義塾長鎌田榮吉氏、早稻田大學總長高田早苗氏、金子堅太郎伯、日銀總裁深井英五氏、荒木貞夫大將、

講演の要旨は、何れも貴重なものであつたが、記録を残しておかなかつたことは、今でも残念に感じて居る。只高橋翁の講演は翁自身で残されて居られたので申譯のない氣がして、恐縮と感謝の次第である。後年高橋翁に隨想録と云ふ、有益な著述が出た。その書中に七ページに渉る長文で、卒業式に於ける、翁の講演要旨が掲載せられて居た。

卒業式に臨場せられた來賓は、二三百人を下ることがなかつた。名士の講演は來賓を多數招致した所以で、他方又縣立商工實習學校と、市立工業專修學校と、三校合同の舉式であつたためでもあると思ふ。千三百人を容する式場に全部を收容することが出来ないから、實習學校の低年級の生徒を制限したものだつた。

卒業式は來賓の公務時間のことを考慮して、午後に舉行した。式後主賓を市の有志でホテルニューグランドに招待して、晚餐會を催した。これ又頗る盛大であつた。

猶又式場に於て讀まれた三校卒業生の代表答辭は、壇上に立つて聞く私を感激せしめた。來

賓中の方々に、高工卒業式の華は、卒業生の答辭である、とまで嘆賞せられたものであつた。特に震災直後の實習學校卒業生の答辭は、教室なく露天で教授を受けた苦難と、自然に湧き出た師弟の愛情を、序述した一節は、満場の主客を泣かしめた。私にはなつかしき記憶である。純真なる青年學徒の琴線に觸れた情緒は、人を動かさずにはやまない。これを聞いた私は、一生教職を離れたくない氣分にならざるを得なかつた。恐らくは同僚の方々も、そうであつたらうと思う。今は總て過去の夢である。

### 横濱刑務所の落成式に招かれて

文豪ホーソンの書いた本の中で、如何に人間がユートピアを抱いて、自由の境に自己の好む所の社會を組織しても、墓場と監獄は、出来るものであると云ふ意味の事を讀んだことを記憶して居る。

墓場はどうしても、必要であるとは誰しも疑はない。が監獄はなくすることが出来ないものであらうか。どこの國にも刑法が制定せられて居る。従つて監獄のない國はない。私は十五年の横濱高工生活で、無處罰主義を遵守し、學校監獄の用のなかつたことは、愉快なる思ひ出である。

さてついこの間、横濱の刑務所、即ち監獄の新築が落成して、その落成式に私も招待せられた。抑この刑務所は根岸町の掘割に沿つてあつたものが、大震災で崩壊焼失して、今の場所即ち上大岡町に移轉して、やつとこの六月落成式を舉げた。横濱高工も同じ運命に遭つたのだが、今に粗末なバラックで授業し、いつ新校舎が出来て落成式を舉げ得るか、豫期し得ないのである。刑務所新建築の經費は大體高工と同じで、約百七十萬圓で實に堂々たるものである。やはり墓場と同じようにどう云ふ理想境に於てもなくてはならないものと見え、子弟を教育する殿堂である高工をおいとけぼりにして、ひと足先に刑務所は非常に立派に出來上つた。

落成式には非常に大勢の人が招待を受けて來られた。司法大臣も親しく臨場せられ、従つて

司法關係の大官も多數見えておられた。そして各方面の代表者からの祝辭の朗讀、又は講演があつた。何れも異口同音に立派な刑務所の新築落成で慶賀の次第であるとのことであつた。私は瞞目して聞いて居た。誰かが刑務所の繁昌が好ましきものでないと語つてくれる人があるかと、待つて居たが、それはなかつた。

成程司法の立場から云へば、刑務所の外觀又内容を整備することは、文化社會の義務とも云ふべきことで實に慶賀すべき事だと思はれる。併し國家の大局から見れば、刑務所の繁昌は決して誇るに足るものではなからう。之を我々の如き司法に關係のないものから見れば、犯罪と云ふものは我々社會の當然の出來事であると、漫然と考へられないのである。即ち一人でも罪を犯かすと云ふ事は、社會の何處かに缺點があるのである。之を矯正して凡ての人間を一人も洩れなく、眞直な人間の道を踏ましてやらねばならぬと云ふ、大きな社會的理想は我國上下を通じて缺けて居るのではないかと云ふ感じが與へられた。これが私の落成式に列した所感である。實際人間は世道人心を踏み外す事さへなければ、監獄と云ふ様なものは全く無用なもので

ある。監獄が無用となれば、恐らく裁判所も司法省も全然無用の長物でなくてはならぬ。さう云ふ社會的理想に向つて人心を指導してゆく事は、我々國民相互の義務であると考えたいものである。その後私は依頼により、刑務所の新大講堂で在所者一同のため刑務所不用の説を陳述したことがあつた。(昭和十一年)

### 名教自然碑の除幕式に招かれて

一言御挨拶を申し上げます。

本日は私の爲に洵に盛大なるこの記念碑除幕式を舉行せられました、態々御遠方から御來臨を忝なうした御方もあり、洵に光榮且恐縮の至りに堪へない次第であります。

又斯の如き式を擧げるまでには、委員長を始め各委員のお方が非常な御努力になつたことゝ存じまして、厚く御禮を申し上げます。

尙ほ又この記念事業に御同情御協賛下さいました方々に對しては洵に御禮の申しようがありません。總ては私に取つて誠に光榮至極であります。之は此處に幾時間立つて御禮を申上げても足りませぬ。晩まで掛つても逆も足りませぬ。それ故に之は私が死んで墓に行くまで、その間私は御禮申し續けて居らねばならぬと存じて居ります。どうぞその點御諒承願ひます。

又只今は青木市長、有吉閣下、徳富先生、このお三方からして誠に過分の御讃辭を頂戴致しまして聽いて居りますと、何處か穴でもあれば入つてしまひたいやうな氣も致しました。誠に當らないことであります。

殊に徳富先生には、あの日野の墓地に先年私は墓を拵へましたが、先生がその墓の石にちやんと私の名を刻んで下さつて居ります。私は先生のお書きになつた墓の中へ入つて行かうと思つて居るのでありますが、只今亦先生からして過分の讃辭を戴いたのでありますが、之はもう私に對しての讀經の様な積りで喜んで私は拜聽致しました。御禮は幾ら申上げても盡きませぬ。

斯ういふ場合には御禮を申上げたら、此處を引退るのが禮であると存じまするが、折角のこ

とでありますからして、長いことはお話し致しませぬが、一寸だけ私の感じて居るところを申述べさして戴き度いと存じます。

教育の指針とする處は、

明治大帝の下し賜つたところの教育勅語そのものより外に何一物もありません。吾々教育家がこの教育勅語を奉戴致し、之を味つて、さうして教育に従事するのであります。併しながら教育家自身としては何等かの主義主張、又信念といふやうなものを持つて、この教育勅語と云うものを信奉致す次第であります。私はその自身の主張或は信念と云ふやうなものに付きましては、青少年學生の自覺自發と云ふものを根底に考へたのであります。自覺自發と云ふものをも少し偉さうな言葉で言つたならば、それは自由啓發主義、斯う云ふところのものであります。

古の書物の中を見ますと、「不嚴而整」といふ言葉がある。之は學生の控室に今もこの額が懸つて居りますが「嚴ナラズシテ而シテ整フ」とは喧しく言はずとも整つて行くといふことで、若し自由啓發主義と云ふものが徹底して行はれるならば、この言葉は必ず實現せられる。それ

を私は目標にして居つた。それ故に理窟なしに、議論なしに、文句なしにやつて行かう。出来るならばさう云ふやうにやつて行かう。難かしい規則は拵へぬ。厳しい命令は發せない。若し自由啓發主義といふものが徹底したならば、そこまで行くであらうと云ふ事を念慮に致したのであります。

而して信賴するところの同僚諸君の援けに依り、多くの前途有望なる青年學生の中に伍して勉強するが如く、又せざるが如く、ぐずぐずと私は學校長としての十五年を送つた。けれども二六時中忘れずに念慮とするところは、只今申したところにあつたのであります。

徳富先生の傍に立つて申上げるのも如何かと存じますが、私は一兩日前に東京日々新聞で先生のお書きになつたところのものを見た。先生は英國民と云ふものは正邪善惡と云ふものと、利害得失と云ふものと同じやうに見て居る。

斯う云ふやうな批評を英吉利人に對しせられて居る。先生は憂國の名文を以て痛快に英國人を叱り付けて居る。特に今日の世の中に於きまして、先生のあの言葉を、あの文句を見まして

私は所謂溜飲が下つたやうな氣が致します。それで英吉利人が果して教育せられたか、英吉利がそれに依つて悔ひ改め、正邪善惡と利害得失は違ふものぢや、惡かつたと英吉利人が啓發せられたかどうかと考へて見ますと、中々そうではなからうと思はれます。併しながら吾々はそれに依つて英吉利人に對する認識といふものを強化されたといふことは確かであると思ふ。

それと同様に青年學生に適切な情理を持つて行つて、斯うせよ、あゝせよ、と言つても中々云ふことを聽くものではない。人間と云ふものはその時代に依り、環境に依り、頗る自我的であるから中々云ふことを聽かない。

孔子の仁義禮智信を如何に説いても、又經世憂國に口角泡を飛ばしても、中々その人々の環境や職業などに依つて容易に頭に入るものではない。説かないよりも効があると云ふことは無論であるが、さう思つたやうに効能は認められない。如何に吾々教育家がさういふ事に對して朝から晩まで、學生の顔を見れば仁義禮智信或は經世濟民を説いても、どれだけそれが徹底するかと云ふことを考へますと、實に教育者と云ふものゝ無力を感じざるを得ないのであります。

ところが私考へまするのに、道德とか知識とか云ふものは是は人間の拵へたものである。人間の拵へたものならば、その道德や知識を超越したもう一つ上に何物かあるのではないかと云ふ事が思へる。人間の道德や知識を超えた一段高いところに何かあるのではないか。さうして一種の電波がそのところから出て居るのではないかと思はれる。その電波と云ふものを感ずることに依つて、即ち天來の福音に依つて人間といふものに何等かの違ひが出て来る。

人間の作つた道德や智識だけならそれは矢張り人間。その上にある何物かに感ずることに依つて初めて人間より少し偉いところの超人、神様だとか佛様とか云ふものになるのではなからうか。

東郷元帥、高橋是清翁の如きは一人は神様で一人は佛様。そう云ふ人は生きて居る時から人間の作つた道德や知識の上にある何物かを幾分感じていたのではなからうか。斯う云ふ感じが致します。そう云ふ點から考へて見ますと、孔孟の教へだけに凝り固まると如何にも人間らしくはなりません。

併し神様や佛様のやうな人格が出来るものでせうか。それにはどうしてもこの孔孟の教へに加うるに、老子や莊子所謂老莊の考へと云ふものをそこに持つて行かなければ駄目なような氣がしてならない。世の中には所謂八宗兼學と云ふ事があります。一つところに凝り固まらず、四方八方を見てそれを自分で考へて行く。斯ういふ事が宜しいのではないかと思ふ。「名教自然」の四字の中には孔孟の教へもあれば老莊の思想も入つて居る、と私の頭に浮び出た文句である。私の今まで考へて居たところの教育上の考へは、名教自然の四字に落着くやうに考へる、この四字の中には猶何處から來るか分らない彼の不思議の靈光をも受取り得る或るものが存在するのではないかと思はれる。

この考への下に青年學生を教育し、國家の進運、文化の發展に寄與し、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、所謂君の馬前に一死報國の國士と云ふものを輩出したい。是が私の念願であり、又私の教育の理想であつた。抑々教師と學生の間は恰も親と子のやうなものであります。それであるから親が時々外に出て行けば歸りにはお土産を買つて來て子供を喜ばすと云ふことも忘れ

てはならない。お土産一つも買つて來ない親ならば、如何に親子の間でも情愛が移らない。

又假令買つて來ても歸る度に煎餅ばかりでも子供は喜ぶまい。それならば時にはチョコレート、チョコレートもよいが歸る度にチョコレートではやはり子供は親の親切に感じない。

校長は親であるからよく子供の心中を察して珍しいお土産を買つて來なければならぬ。食物も買つて來れば玩具も買つて來て子供を喜ばしてやらなければならぬ。「名教自然」は是は澤山のお土産の卸しどころ、東京で言へば三越とか、横濱で言へば野澤屋とかいふところぢやと思ふ。此處に入つて行けば色々なお土産を賣つて居る。食物も着る物も玩具も、何でもデパートだからある。私は斯ういふデパートのあるところを見付け出して喜んだのであります。併しながら、どうも私の中着の中には鏹一文もないとは申しませんが、どうも三越や野澤屋の前を再三あちこち通つたが、私の財布は軽い。そこでお土産を買出すことは出来なかつた。

是は如何にも残念に考へて居る次第、もう一遍校長になりましたところでやはり財布は軽いからデパートで賣つて居るところは見出したけれども、矢張り買ふことが出来ないと言ふことを今でも残念に思ふ。けれども私の後にこのデパートから澤山のお土産を買へるやうな金持の

方々が揃つて居られることであらうと私は安心して居る。併しながら子供の土産をあゝいふデパートから買うて来るのは子供の嫉の爲に悪い。斯う云ふことであるならば、どうぞこの名教自然のデパートを何でなりと打壊して戴きたい。私は決して苦情は申しませぬ。その御考へで居て貰ひたい。

終りに一言附加へて置きますことは、名教自然のこの四字は中々大きな字であります。私は生れて初めて斯う云ふ大きな字を書きました。是はもう精一杯。それに悪筆ぢや。

當世流行の言葉に「心臓が強い」と云ふ言葉がある。如何にも之を書くには書きましたが、心臓の強かつたことは私自身に全く自覺して居ります。その點どうかお波取りを願ひたい。然るに一代の文豪蘇峯徳富先生が御撰文になつた文章と、横濱の巨人三溪原先生が名筆を揮はれたものと私は同居することになつて居ります。誠に光榮の至りではありませんが、同時に誠に恐縮に堪へませぬ。恐れ入つている次第であります。

茲に兩先生に厚く御禮申上げる次第であります。

誠に今日は皆さんより多大の御厚遇を蒙つた光榮に對し、重ねて厚く御禮を申上げて御挨拶と致します。

(昭和十二年十一月)